泉
いずみ

ー目次ー

表紙「牧場の牛」
「コラム百折不撓」住職
連載「ハヤブサ物語13」
「狂歌五首」野呂正音
ハザード会フィールドワーク報告
竹浦の北目さん逝く
たけわらコーヒー物語
連載「共に生きる①」老僧
さとりの知恵を読む「土台のない三階」
掲示板・お知らせなど

牛：堀田貞子　背景：野呂博子・野呂小蓮　撮影：野呂美道

コロナ禍は　モーおしまいと　年明くる　　博子

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

コラム「百折不撓」

野呂大悟

あけましておめでとうございます。今年の冬は暖かいと思いきや、急に冷え込む寒暖差。コロナもまだまだ予断を許さぬ日々が続いています。体調には充分ご注意ください。

さて、12月13日に無事に報恩講をお勤めすることができました。報恩講は親鸞聖人の御命日（法事）であり、真宗門徒にとっては最も大切な行事です。今年はコロナの影響で永代経は春も秋も内勤めに変更しました。そのため、通常でやるか、内勤めとするか、最後まで悩みましたが、やはり何もかも中止となっては、何も出来ず、それが当たり前になってはならないと、感染防止対策やオンライン視聴など新たなやり方も考え、通常に近い形での開催としました。お手伝いくださった方々、ご参拝くださった方々には心より感謝申し上げます。

今回は、満日中の法要後、「老いの風景」の著者である渡辺哲雄氏に「豊かさというストレス」と題し、講演会を行いました。当初は春の永代経でご講演を依頼しておりました。しかし、縮小（内勤め）のため、延期となり今回の報恩講でのご講演となりました。

渡辺氏のお話は、現代の技術の進歩により便利な世の中になりつつあるが、技術の進歩による便利さが＝人々の豊かさに全てつながっていることではない。という事を自らの経験をもとにお話くださいました。古き良き昭和の頃のお話を聞きながら、きっとその頃の情景の懐かしさと共に、亡き人が再び命を宿したかのような感覚になった方も多いのではないでしょうか。仏事とは、命の尊さに出会う場であると思います。それは、今の命を育んでくださる周りの人々、命のバトンを繋げてくださった亡き人々に感謝し、今の命のあり方を自らに問うことだと。私もまだまだ若いからか、あって当たり前の命だと思いながら毎日過ごしています。しかし、コロナもあり、明日は我が身と命に向き合うことが多かった一年だからこそ、渡辺氏のお話は貴重な時間となりました。写真でも報恩講の様子をお伝えします。

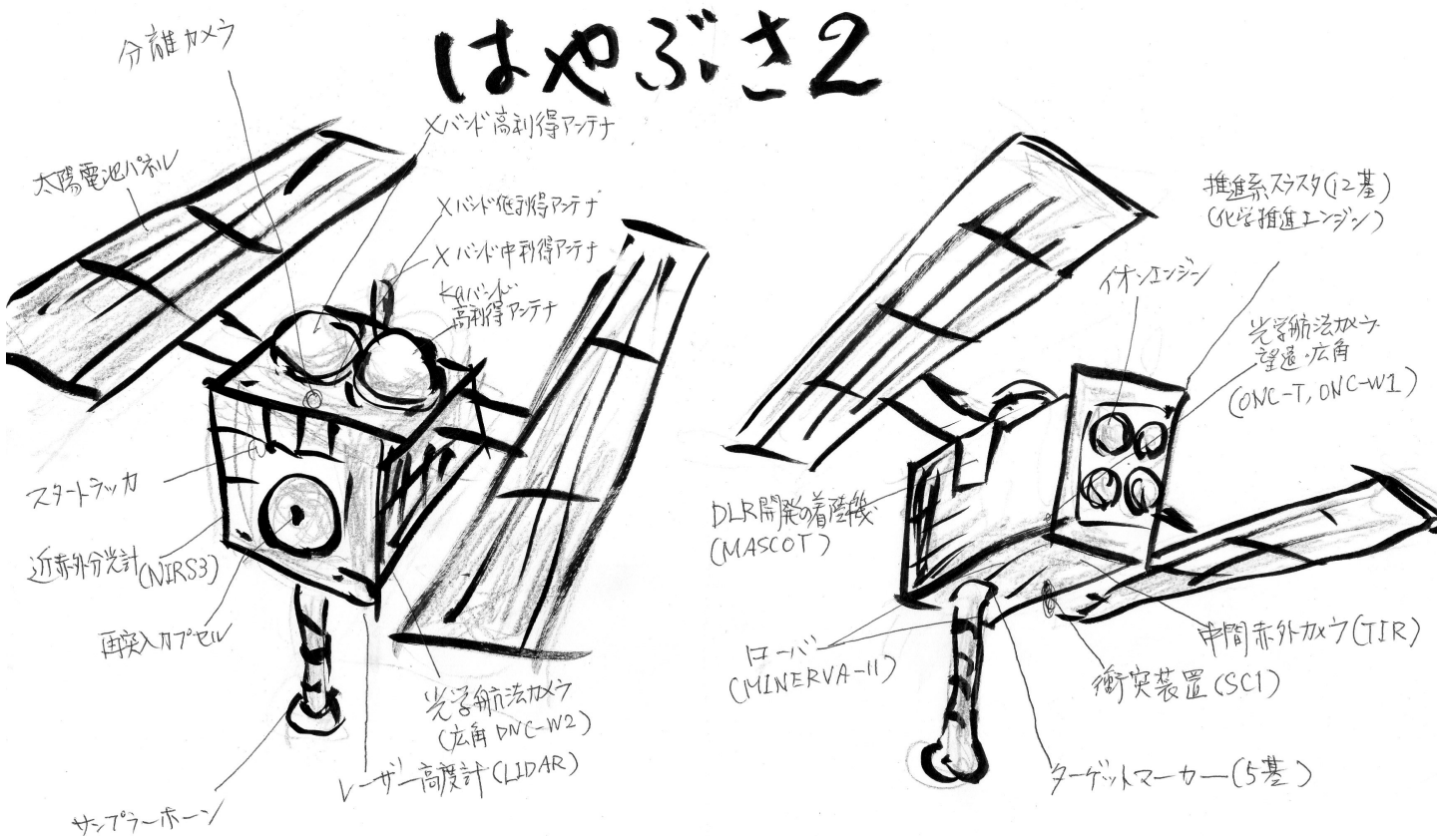
満日中登高座

おみがきの様子

渡辺哲雄氏　講演会

本尊のお荘厳

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001



◆今回、特別に僕の弟、はやぶさ2の快挙の話をします。彼は十二月六日に僕と同じオーストラリアのウーメラ砂漠に無事カプセルを落としてくれた。◆それからが大したもんだ。彼は再び地球圏外に脱出して、ふたたび惑星探査に向かった。十一年後に到着予定という。気の遠くなる話だが、初代の僕は大気圏で燃え尽きてしまったので、JAXAのスタッフが不憫に思い弟を生かしてくれた。◆今度のミッションは1000%の成功と言われた。事実、彼がもたらしたカプセル（玉手箱）の中には、竜宮の岩石がいっぱい入っていたことが確認された。◆コロナ期に、唯一の明るい話題になった。次回をご期待下さいね！

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

「狂歌五首」　野呂正音（前前々住職）

正音の狂歌　野呂美道

檀家のK宅より出てきた祖父正音の歌です。親友の金蔵さんの法要にあてて詠んだものです。祖父のユーモアと機転に圧倒されました。解説は実弟の後藤信英にたのみました。上手に説明してくれました。

金蔵君の三年忌に際して五首狂歌をよめる

酒好きで倉は建たねど居屋は出来　金を残してキセル上戸

お酒が好きで蔵は建たなかったけれど住む家はできて、ちゃんとお金も残してまさにキセル上戸だねえ。

（キセルの両端が金具であるように、酒上戸の対極に遺産を残していることを褒めている。）

朝起きてキセルくわへて二ゴ通し　つまる事なく働きにける

朝起きがけに煙草を吸い、そのキセルの筒を藁のニゴで掃除する。また、酒も二合飲んで体にも通せばつまることがなくよく働けるというものだ。

ソレ入院ヤレ退院と喜べど　つきぬ命は弥陀の名号

人はそれ入院と嘆いたりやれ退院できたと喜んだりするが、その命の根本は名号「南無阿弥陀仏」であって尽きないものだ。

胃の薬フッと縁を切りたれば　となり里の庫もくづれける哉

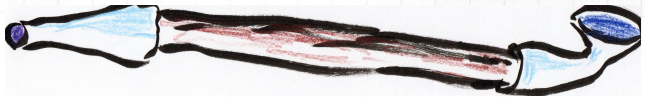
胃薬の袋の端をフッと切るようにこの世との縁が切れると、隣の家（実家）とも関係が薄くなっていくものかなあ。

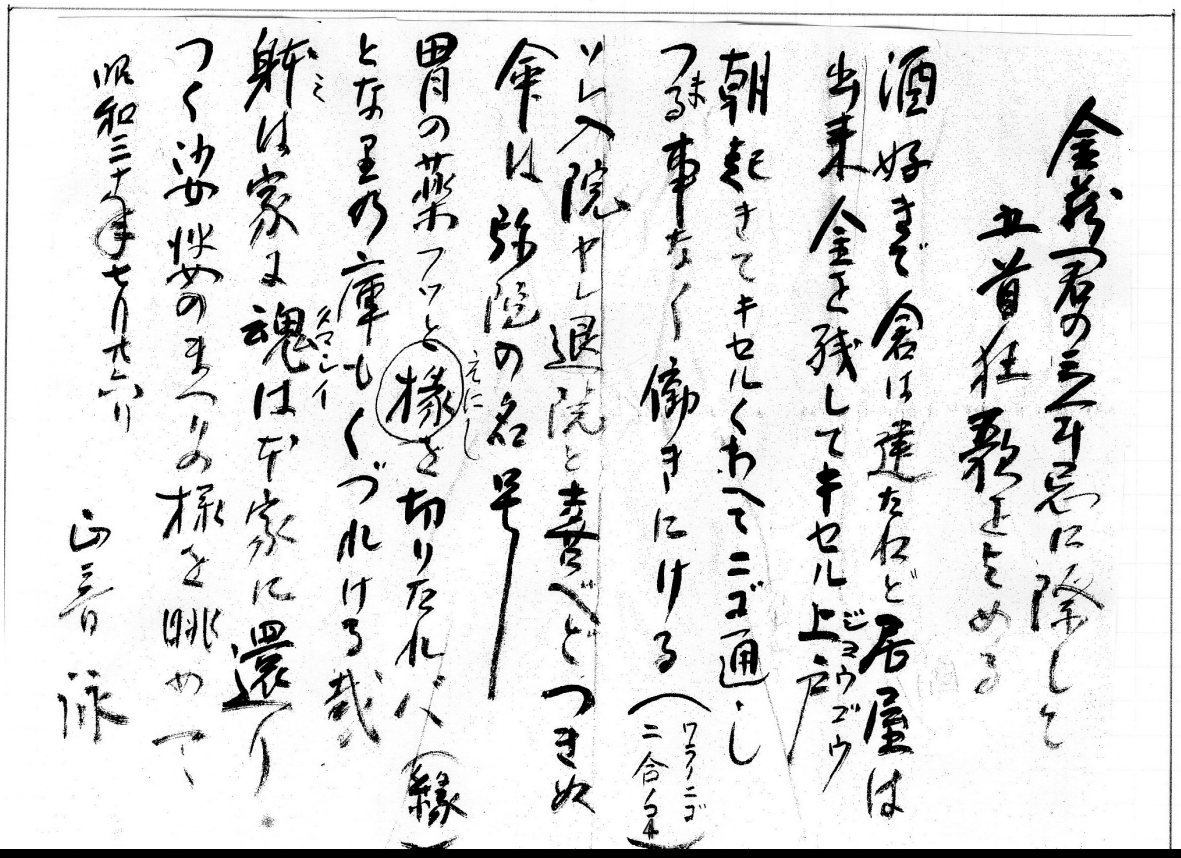
躰は家に魂は本家に還りつく　娑婆のまつりの様を眺めつ

（三回忌を勤めてもらったことで）体は家に魂は実家に還り、こうして世間の賑わいを眺めていることだなあ。

昭和三十年七月二十六日　　**正音　詠**

六十六年前に、祖父正音が神田金蔵さんの三回忌法要の折に贈った狂歌です。金蔵さんの生前から法事に至るまで順に五首も詠まれていて、住職（正音）と檀家（金蔵さん）の親しかった関係が偲ばれます。





発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

ハザード会フィールドワーク報告　野呂美道

◆十二月六日、暖かい陽気の中、会員は二グループに分かれて、三和町の大成（おおなり）地区と、下北条地区の調査を行った。以前調査した地区ともダブるけれど、もう一度詳細な調査をして、実際に避難が必要な時に、すぐ役立つ地図を作成したいと思ったからだ。◆安泉寺から各家までの距離もできるかぎり詳細に測った。そして、注意すべき道路はないか、危険な建物はないか、その状態も詳しく調べた。◆その結果、普段気づかなかった堤防への避難路を新たに見つけた。階段が見つかった。また、車いすでのなだらかなスロープのような場所も見つかった。そして、やや高い平地も見つかった。広場で炊き出しや、緊急避難場所にも使える。◆二つの地区で調べた情報をもとに、冬休み、時間に余裕のある時に集まって、地図作成にとりかかろうと思っている。各会員のモチベーションを如何に維持するかに腐心している。特に新会員は、被災地に足を運んでいないので、想像ができない面もあろうと思うが、それでもちゃんと真面目に作業をしてくれている。そういうことを思うと今年は是非被災地へ行きたい。彼らを現地で学ばせたいと強く思う。◆私たちの活動は、微々たるものかも知れない。しかし、このような活動がきっかけで、少しずつ運動の輪が広がってほしい。会員の住む地区でも、少しずつこのような地図作成の運動が浸透してほしい。◆まず、家庭から、そして地域へと防災の意識の高まりを願う。あせらず、ゆっくりでいいから、本物をめざして、進みたい。会員はみなやる気充分な精鋭ぞろいだ。

大成・下北条を調査する委員

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

竹浦の北目さん逝く

野呂美道

北目富造さん

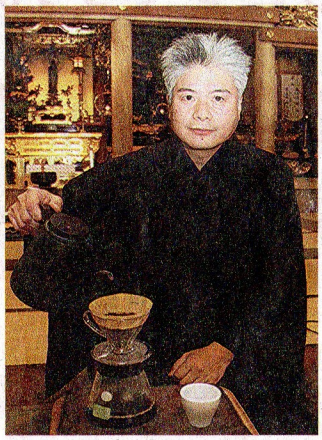
◆写真は二〇一二年三月二二日、私が一枚の葉書をもって、女川町竹浦（たげな）を初めて訪ねた時のものだ。湾から十数m、建物の赤いラインまで津波が来た。その下で片付けをしている人たちが、北目・鈴木夫婦だ。◆写真右端の方が、北目富造さん。建築士として竹浦集団高台移転の原動力となった一人だ。さる十一月他界された。◆ハザードの子供達の質問に丁寧な直筆の返事をされた。おそらく病室から、最期のメッセージを書かれたと思う。◆当時、私がぶしつけにもいきなり四人にインタビューをした。その時の動画も残っている。物資配給のお礼の手紙を携えて行ったことで、私はすっかり信用された。以来、八年近く、鈴木・北目夫妻をはじめとして、竹浦との交流が続いている。◆北目夫婦は釣りが趣味で、竹浦によく来ていた。手ごろな空き家があったので、移住し、住民と交流しながら生活を謳歌していた。そこに津波が襲い、被災者となった。子ども達は何度となく仙台の実家に戻ることを勧めたが、夫婦はみんなで高台に移転し、ここを動かないと決めた。◆北目さんの金言。瓦礫を見つめた当初は絶望感に襲われた。しかし、二次避難した仙北市のホテルで、窓の外の新緑がみどりを増すのをみて、俄然復興の向けてのファイトが湧いたと述懐する。◆北目さんに無限の力を与えたのは、皮肉にも津波をもたらした大自然の悠々たる営みだった。それからは、建築士の技量を生かして、全員が高台移転できる具体的な住宅の設計図をフリーハンドで描いた。私は仮設住宅でそれを拝見した時、何という素晴らしい着想かと脱帽した。◆高齢者が二人でプライバシーを守りながら一棟の住宅で暮らせるように、素晴らしい設計がなされた図面にも驚嘆した。鈴木・北目両氏は竹浦集団高台移転のためにその後奔走し、やっと七年目にして実現した。仮設住宅には六年も住み続けた。私たちは北目さんの勇気とこだわりと持続力に大いに学ぶ所が大である。◆北目さんがなぜ竹浦を離れなかったのか。それは、地域住民たちが北目さん夫婦を全面的に受け入れてくれたからである。その温情に北目さんは応えたかった、私はそう思う。◆どうか安心してお浄土より私たちを見守って下さい！

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

2020 12/11 中日

住職の傍らコーヒー研究
自家焙煎の豆を販売

竹原（たけはら）　了珠（りょうしゅ）さん(50)



この人

コーヒー好きが高じ、住職としての仕事の傍ら、豆を焙煎（ばいせん）している。商品として地域の小売店で販売し、全国の愛好家らにも発送。ひそかな人気を集め「門徒の方だけではない新たなつながりが生まれている」と喜ぶ。

石川県七尾市伊久留（いくる）町の浄願寺の家に生まれた。中学生のころ、贈り物のレギュラーコーヒーを口にして、味の豊かさや香りに感動。好んで飲むようになった。大学卒業後、東本願寺（京都市）や東別院（名古屋市）に勤めた際も、各国の豆を買い集めたり手作りの焙煎機を試したりした。

実家に戻り、二〇一七年に納屋を改修し、夢だった焙煎所を設置。「たけわら珈琲（コーヒー）豆店」を開業し、門徒に振る舞うほか、各地の同じ宗派の住職に頼まれ、その門徒にも届けている。「図らずも、人がお寺に足を運ぶ機会を増やすことができてうれしい」と語る。

研究心は尽きず、コーヒー豆とブルーベリーを掛け合わせた新商品を開発。今後も探究を続ける考え。「商売が仕事ではない住職だからこそ、ワクワクするようなものを純粋に追い求めていける」。仏とコーヒーの道を歩み続けていくつもりだ。（中川紘希）

2020年12月11日中日新聞朝刊掲載

◆新聞記事に目を通してほしい。竹原住職とは十数年来の友人である。出会いは名古屋教務所の教導（教区の布教推進者）で赴任していた時、私たちの組（そ：寺のグループ）が本山へ奉仕に出かけた時に、同行してくれたのがきっかけである。◆何と言っても、東日本大震災の時のことが印象に残っている。名古屋教区は若手を中心に「デラボラなごや」を結成した。「どえりゃー寺のボランティアだがや」という意味。教務所ではその事務局の中心となって奔走してくれた。物資の搬送、現地での炊き出し、そして何よりも印象深かったのは、名古屋別院で福島の親子の保養宿泊事業での活躍だ。◆厨房で、除菌を徹底的に指示し、仕切っていた彼のカッコよさを私は目の覚める思いで眺めていた。◆その竹原さんが、自坊の事情で能登へ帰った。私は彼とは寺報での交流を絶やさなかった。自坊へ戻ってから彼は空き部屋をコーヒーの焙煎小屋に仕立てて、「たけわらコーヒー」と銘打って、販売してしまうまでに腕を上げた。◆甥に聞けば、彼は京都の学生時代、鴨川河畔で一斗缶を使いコーヒーを焙煎して研究していたとのこと、その傾倒ぶりが高じて今日がある。◆彼のコーヒーは粒よりで、どの銘柄も深い味わいがあり旨い。私は彼のコーヒーしか飲まなくなってしまっている自分に気がついた。毎日の生活に「たけわらコーヒー」は欠かせないものとなった。香り豊かなコーヒーを味わう時にいつも、除菌に神経をとがらせていた竹原さんの奮闘姿が目に浮かぶ。これからも美味しいコーヒーをめざして、我々愛飲家をうならせてくださいね！（読者の皆さん、お問い合わせは老僧まで）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

新連載「共に生きる①」

野呂美道

◆Eテレ「こころの時代」のお話を5回にわたり皆さんに紹介します。初回放映日は昨年6月23日です。題名は「共に生きる。孤児が教えてくれたもの」です。◆大阪堺市にある介護福祉施設特別養護老人ホーム「故郷の家」（こきょうのいえ）理事長は日本名を田内基（もとい）と言い、韓国名をユン・ギと言う。彼は韓国人の父と日本人の母を持つ。韓国に生まれて育ったが、本籍は高知県。生まれて以来彼は自分のアイデンティティーに悩んだ。「私はなにじんだ？」◆田内はこう思っている。「私の心の中には両方の国が入っている。50％と50％。私はハーフではなく、**ダブル**である。自分だからこそできる新しい可能性を持っている。」そう思って彼は老人ホームの中に、韓国文化を取り入れた。現在日本人60人と在日韓国人17人で暮らしている。食事に良く出しているのはビビンバ、そしていつも添えるのはキムチと梅干だ。◆施設を立ち上げるきっかけになったのは36年前、1984年3月13日、二人の在日韓国人の孤独死の記事だった。一人は死後13日後、もう一人は6か月後に発見された。田内は深い疑問を持つ。どうして、祝い、泣き、心配してくれる日本人が一人もいない中、在日韓国人はひっそりと死んで行かねばならないのか。こんなことでいいのか。◆施設にはキリスト教の礼拝堂があり、その奥に無縁となった人達の遺骨が23体眠る、その一人、イ・ソッコンさんは生前中は靴づくりの名人だった。寡黙な彼は、いつもタバコをふかしながら、ずっと遠くを眺めて時を過ごしていた。◆戦争中の暗い時代から、戦後の平和な時代になった日本で、「在日の皆さん、長い間ご苦労様でした。これからは安心して暮らして下さい。」と優しい言葉をかける日本人が一人でもいたなら、韓国の方々はどんなに嬉しいか。田内はそんなことを思った。◆田内の父、ユン・チホはキリスト教の伝道師だった。母の田内千鶴子は役人の父と韓国に移住し、ユンと結婚し、ユン・ギは4人兄弟の長男としてこの世に生を受けた。少年期のユンは同級生から良くいじめを受けた。「チョッパリ（日本人）」とからかわれた。「私は韓国人で、ユン・ギという名前もある。」と言っても、母親が日本人の彼はやはりいじめられた。国籍を巡ることでアイデンティティーの悩みを持ち続けることになる。（続く）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

金持ちではあるが愚かな人がいた。他人の家の三階づくりの高層が高くそびえて、美しいのを見てうらやましく思い、自分も金持ちなのだから、高層の家を造ろうと思った。◆大工を呼んで建築を言いつけた。大工は承知して、まず基礎を作り、二階を組み、それから三階に進もうとした。主人はこれを見て、もどかしそうに叫んだ。◆「わたしの求めるのは土台ではない、一階でもない、二階でもない、三階の高楼（たかどの）だけだ。早くそれを作れ。」と。◆愚かな者は、努め励むことを知らないで、ただ良い結果だけを求める。しかし、土台のない三階はありえないように、努め励むことなくして、良い結果を得られるはずがない。

◆百喩経（ひゃくゆきょう）より

◎土台のない建物はない

◆ものごとには必ず基礎になるものがあります。それを抜きにして大成は望めません。あたりまえのことですが、これが意外に忘れられがちです。◆この説話では、土台、一階、二階を抜きにして、いきなり三階を造れと要求する愚かなお金持ちの話をとりあげています。◆仕事にしても勉強にしても、基礎は何よりも重要です。まずは基礎をしっかりと学び、それから先の段階に順を追って進んでいくものです。それは努力の過程であり、また辛苦の過程でもあります。努力と辛苦なくしては、ものごとは達成しないといってもいいでしょう。◆「涅槃経」によれば、ブッダが亡くなるときの最後の言葉は、「ものごとはすべて移り変わりゆくものである。怠ることなく、努め励みなさい」というものであったといいます。ここにも、努め励むことの重要性が示されています。◆かつて中国仏教では、お経の段階的なレベルが示されたことがありました。◆それによれば、ブッダの教えはまず高度に説かれた（華厳の教え）けれども、誰も理解することができず、順を追って平易な教えから高度な教えへ、阿含の教え、方等の教え、般若の教え、法華・涅槃の教え……と説かれていったはずだというのです。◆日本仏教にも「唯識三年、倶舎八年」という言葉があります。これは仏教学の基礎額としての「倶舎論」の勉強を八年していれば、難解な唯識も三年で理解できるという意味の言葉です。もちろんどのような学問も、基礎からしていかなければ到達することはできません。基礎は、最も大事でなおざりにできないものなのです。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

一月の行事予定

修正会（しゅしょうえ）　一月一日（金）十時
写真クラブ例会　一月二十三日（土）十九時
ハザード会例会　一月二十四日（日）九時

今月の掲示板

成功することは
倒れるたびに起き上がる
ということだ

ホセ・ムヒカ

ウルグァイの元大統領の言葉です。数々の名言を残しています。私の父（野呂界雄）が数々の挫折（妻との死別・腎臓摘出・二度の火災・結核・肺気腫）をエネルギーにしてきたのと重なります。父は失敗の多い成功者でした。（老僧記）

編集後記（野呂大悟）

◆「鬼滅の刃」が大流行！娘の小蓮も大好きで、単行本も全巻購入、映画も観に行きました。私は少ししか本も読んでいないので、詳しいことは良く分かりませんが、悪者に鬼にされた人間は、お腹が空くと力を得るために人間を好んで食べるという事で、選ばれた人間がその悪い鬼達（鬼にされた人間）を成敗し人間を守るという話のようです。ただ、人間もお腹が空けば、生き物を殺し食べます。しかし、殺された動物から報復で殺されることはありません。少し見方を変えれば（牛や豚などから見れば）、私たち人間も鬼滅の刃に出てくる鬼と変わりありませんよね。もし、動物から報復されるようなことがあれば、全力で闘うことでしょう。もしかしたら、鬼滅に出てくる鬼は、今の世の人間の姿を描いているのかしれませんね。

◆Kさんからの絵手紙です。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001